ポラリス Polaris

秋田の魅力向上 パッケージやコピーの工夫で

土井 英司（平成５年卒）
（エリエス・ブック・コンサルティング 代表取締役）

二〇一〇年にもっとも売れた書籍は、岩崎夏海・著『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』（ダイヤモンド社）だった。同書は三月十五日現在、二百二十万部のベストセラーとなっているが、百万部超えは、ダイヤモンド社創業以来初の快挙らしく、本書の影響で、既に十分普及していたはずの『マネジメント　エッセンシャル版』も当初十一万部だったのが追加で五十四万部＝計六十五万部と、大きく部数を伸ばした。

著者の岩崎氏が流行のアイドルグループＡＫＢ48の仕掛け人であることや、それにより同書の露出が増したのも事実だが、注目したいのは、古典を現代風にして伝えることの意義である。美少女イラストを起用したライトノベル風の奇抜な表紙や話題性にのみとらわれるのではなく、むしろ表現の工夫がなかったことで、貴重な先人の教えが伝わっていなかったことを問題視すべきだろう。

心理学によると、人間には、ヒューリスティクスという行動原理がある。これは、人間が情報の断片だけを見て、全体を判断する行動のことで、いわゆるジャケ買い（表紙だけで内容を判断し、購買にいたること）は、これにあたる。現在のように情報過多の社会では、このヒューリスティクスが促進される。人間はあまりに多くの情報を与えられると、「判断しなくなる」生き物なのである。

筆者は、かつて世界一のオンライン書店、アマゾンの日本語サイト立ち上げに携わり、主にビジネス書のマーケティングを手掛けてきた。かつて名著といわれながらも埋もれていた名著を再発掘して紹介することで、運良く数多くのベストセラーの実現に携わることができた。現在は、独立して「エリエス・ブック・コンサルティング」という会社を起こし、著者や出版社の依頼を受け、ビジネス書のプロデュースやマーケティングを手掛けている。昨年まで担当していた読売新聞の書評コラム「ビジネス５分道場」では、当初二万部だった細谷功・著『地頭力を鍛える』（東洋経済新報社）を、コピーひとつで十七万部のベストセラーに押し上げることができた。その他にも、現在、節約本で売れている横山光昭・著『年収２００万円からの貯金生活宣言』（ディスカヴァー・トゥエンティワン　十八万部、シリーズ累計三十六万部）や、お掃除本で売れている近藤麻理恵・著『人生がときめく片づけの魔法』（サンマーク出版　二十三万部）なども、筆者がプロモーションを手掛けている。いずれもヒットの要因は、現在主流の読者ターゲットに合わせ、パッケージやコピーを工夫したことにあると思っている（年収２００万円という基準は、豊かな時代の年配層にはピンと来ないであろう）。

携帯電話のデザインで一世を風靡した「PANTONE」を思わせるカラフルな表紙で、古典を復活させた新潮文庫の例を見てもわかるように、優れた古典も、パッケージを工夫することで、再度売れるようになるのである。

わが故郷、秋田も食材や伝統工芸品など、良いコンテンツを持っている県だと思うが、果たして店頭に並んだ商品は、それに見合ったパッケージになっているだろうか。

残念ながら、ＧＷに帰省した際、拝見した特産品フェアでは、相変わらず前時代的なパッケージやコピーが並んでおり、食指が動かなかった。

見た目と言葉で売れる二十一世紀のインターネット社会で、デザインやコピーなどの知的財産にお金を払えないメンテリティは致命的である。iPod、iPhoneを世に出した米アップル社が、ユーザーフレンドリーなデザインでソニーに打ち勝ったことを、忘れてはならない。

「中身が良ければ伝わる」というのは、お金を払ってリスクをおかす消費者のことを考えない作り手のエゴである。また、あらゆるものが供給過多の現在、商品の質は高くて当たり前だということも認識すべきだ。

秋田が本気で地域活性化を目指すなら、画像とコピーだけで判断されるインターネットの世界で、勝てる表現を真摯に学ばなければならない。

次回、秋田に帰省した際には、故郷の発展のためにも、大量のお土産を買って帰りたいと思っている。

天上天下

〝貞観の治〟と言えば、世の中がよく治まり、文化の栄えた時代として知られている。その貞観十一年（八六九）に、三陸沿岸に大津波をもたらした巨大地震が発生し、その時のマグニチュードは８・４と推定されている。このたびの東日本大震災の規模はそれを上回る９・０で、死者・行方不明者は二万五千人に近い。▼地震と津波は天災だが、福島第一原子力発電所がもたらした災禍は人災である。二〇〇六年の国会では、大津波による外部電力喪失に起因する原発の危機問題がすでに提起されているし、〇九年には、貞観地震を挙げて大津波再来の可能性を指摘した専門家も存在した。しかし、東京電力も政府もそれらを無視して安全神話に固執し、今日の惨状を招来するに到った。第一原発では、稼働五年前に襲来したチリ地震津波の教訓すら生かしていなかったとして総理大臣が激怒したとも報じられている。▼今後、エネルギー源としての原子力発電の問題と同時に、いかにしたら人間は過去に誠実に学ぶことができるようになるかという点も大きな課題となりそうである。